

体育と保健の ひろば

CONTENTS

特別企画1



あの人の話

高木美帆さんが 歩んできた道

スピードスケート選手・高木美帆 … 2~3

特別企画2



ビジュアル解説

教育政策の動向

東京学芸大学・末松裕基 … 4~7



連載

教育NOW!

- ・体育専科教員による取り組み … 8~9
- ・タブレット活用はメリハリが重要 … 10~11

「小さじ一杯の工夫」で授業が変わる！ 子どもが変わる！

鎌倉女子大学・藤原昌太 … 12

ロンドン便り

時事通信・青木貴紀 … 7





特別企画1
あの人
この話

ワールドカップの最終戦で滑走する高木さん



高木美帆さんが 歩んできた道

——陸上やサッカーでも将来性を期待されていたながら、最終的にスケートを選ばれました。

そこまで深く考えて決めたわけではなく、昔から上を目指すならスケートなのかなと思っていました。スケートより好きなスポーツもありましたが、工夫したり考えたりすることに、一番真剣になれたのがスケートでした。

——距離の専門化が進む中、北京オリンピックでは5種目に出場。多様な種目にチャレンジする姿勢が、幼少期に様々なスポーツに親しんだ姿と重なります。

スポーツへの向き合い方として、“やりたいから真剣にやる”という精神的な部分は共通しているかもしれませんね。「好きなこと、やりたいこと、全部できたらカッコいいじゃん！」という思いをモチベーションにして、いまはスケートに向き合っています。

数多くのスポーツに取り組む場合と、一つのスポーツに絞って取り組む場合とを比べれば、特定のスポーツに取り組む方が技能の上達は早いと思います。でも、様々なスポーツに取り組むことで、そこで努力をしたり、上達のために工夫したり思考したりする機会が多くなるわけですから、そこには意義が見出せると思います。スピードスケートでも同様に、多種目をカバーするために多くの努力が必要で、また、工夫し思考することもたくさんあります。

——印象に残っている指導者の言葉はありますか。

「美帆ちゃんは、100%を出せない性格だよ」と中学の頃に言われたのは今でも心に残っています。たとえば、トレーニングの本数が決まると、体力の配分を無意識に考えて



日本記者クラブでの記者会見

——幼少期から、水泳や陸上、サッカー、ダンスに親しまれてきたそうですね。

水泳を習っていたのは、年長から小学1年生くらいの短い期間でした。陸上は、練習よりも大会への出場が中心で、小学生の間は取り組んでいました。始めたきっかけは、どちらも親の勧めだったように思います。

サッカーは、小学2年生から地元の少年団に入団し、中学3年生までやっています。きっかけは、兄と姉が同じ少年団に入っていたこと、夏はスケート以外のスポーツにも取り組みたかったからです。

ヒップホップダンスは小学校1年生から高校3年生まで習っていました。いとこが習っているのを見に行っただけで、先に兄と姉が初めて、後を追うように始めました。「どうしても始めたい！」と自分の強い意志で始めたのは、ヒップホップが初めてだったと思います。



北京冬季オリンピックで金メダルを獲得した高木さんとコーチ

しまい、“一本ごとに全力を出す！”ということができないんです。変われるように努力してみたのですが、なかなか難しく……。ですので、アベレージをあげて、そのアベレージでも他の人に勝てるまでいこう、と考えるようになりました。

それと、ヨハン・デビットコーチからかけられた言葉で、“同じ人間ができているんだから、なんで自分もできるって考えないんだ？”という教えは、自分の気持ちを強く保つために、私にとって大きなものでした。

——「高校生になったら自分でお弁当を作りなさい」という高木家の方針で、当時は毎朝お弁当作りをされていたそうですね。

朝の限られた時間の中で、役割分担をしながらキッチンでお弁当を作っていました。おかげで今も自炊には全く困らないですね。料理は習慣になっていると、社会に出た後で困らないので、当時は大変でしたが、そういう方針にしてくれた親には感謝しています。

——お弁当作りの習慣もあって、高木選手は今でも自炊を続けられているようです。その姿から、自己管理能力の高さが垣間見えます。料理だけでなく、生活習慣で健康を保つために意識されていることはありますか。

社会人になってからは、「全ての行動に対してプロ意識を持って」とコーチから教わり、それを実行するようになってきました。どういう行動をするのが正解なのかというのは人それぞれだと思いますが、知識がないと気をつけることもできません。それで社会人になりたてのころは、よく休養・睡眠、栄養関係の本を読み、自分の知識を増やすように努めました。

——スポーツだけでなく、学校の成績もトップクラスでした。スポーツと学業の両立で、工夫されていたことはありますか？

高校生の頃は、自転車で片道40分ほどかかる学校に通っていたので、その通学時間を活用するようにしていました。信号で止まった時にメモ書きに目を通して、自転車を漕ぎながら暗唱・暗記するような感じです。

また、一夜漬けが本当に苦手なタイプだったので（遅くまで起きていられないし、集中が続かない）、試験の1週間前から起床時刻を1～2時間早めて勉強していました。私は絵で描くと覚えやすかったので、理科の生物はかなり手の込

だノートを作っていました(笑)。

——読書の習慣をお持ちで、本屋巡りが趣味とのことですが、読書が好きになったきっかけがあれば教えてください。

小学校低学年の頃から本を読むのが好きでした。私が通っていた小学校では、年に2回ぐらい学校で本を買える機会があって、その時は必ず親に頼んで買ってもらっていましたが、町の図書館のバスが小学校にきた時も欠かさず覗いていた記憶があります。

小学校の高学年になって思春期を迎えた頃は、1人で過ごす時間が増えたのですが、その時も図書室でよく本を読んでいた。また、国語がご専門だった担任の先生が、よく本を貸してくださったのも大きかったです。

——これまで様々なジャンルの書籍を読まれてきたと思いますが、思い出に残る一冊があれば、ぜひ教えてください。

小学校高学年の頃に読んだ『リトル・トリー』[※]は、当時幼いながら衝撃を受けたことをよく覚えています。今読み直すとどう感じるかはわからないのですが、また読んでみたい本です。当時の私には、人種差別など、知らない世界を見せてもらったという印象があります。

——「生涯スポーツ」という言葉もありますが、高木さんはこの先の長い生涯、どのような形でスポーツに関わることになりそうでしょうか？

ここまでスポーツに取り組んできた人間として、「スポーツってこんなに素晴らしいんだよ」「身体を動かすって、私たちの心と身体にいいことばかりなんだよ」、と子どもたちにお伝えする活動ができればと考えています。

もちろん、国際大会でしか経験できないことや、自分自身と向き合い続けられる時間が多いこと、たくさんの人との関わりを実感しやすいことなど、アスリートとしてのたくさんの素晴らしい経験はありました。国際大会のトップレベルで戦えるようになってからは、このレベルで戦えることの楽しさや喜びがあって、それを味わえることもアスリートとして幸せだと思います。

でも、競技スポーツをやっていなくても、スポーツで世界の頂上を目指さなくても、身体を動かすだけでたくさんのいいことがあります。自分なりの目標を立てて取り組む時、身体活動をとまなうスポーツは、たくさんの恩恵を私たちに与えてくれます。そのようなスポーツの素晴らしさを、子どもたちに伝えてあげられたらと思います。

高木 美帆 (たかぎ みほ)

1994年生まれ。北京冬季オリンピックでは、3000m、1500m、1000m、500m、団体バシュートと5種目(個人4種目、団体1種目)に出場。1500m、500m、団体バシュートの3種目で銀メダル、1000mでは金メダルを獲得した。冬季オリンピック1大会で4つのメダル獲得は日本人選手史上最多。日本体育大学卒業後、現在は同大学の広報課職員。

※注) 『リトル・トリー』…先住民チェロキー族の血を引き、幼いころに父母に死に別れ祖父母に育てられている少年リトル・トリーが、祖父母の愛情に包まれて、チェロキー族の生き方を受け継いでゆく物語。



教育政策の動向

東京学芸大学准教授 末松裕基

1. 目指される「令和の日本型学校教育」の構築

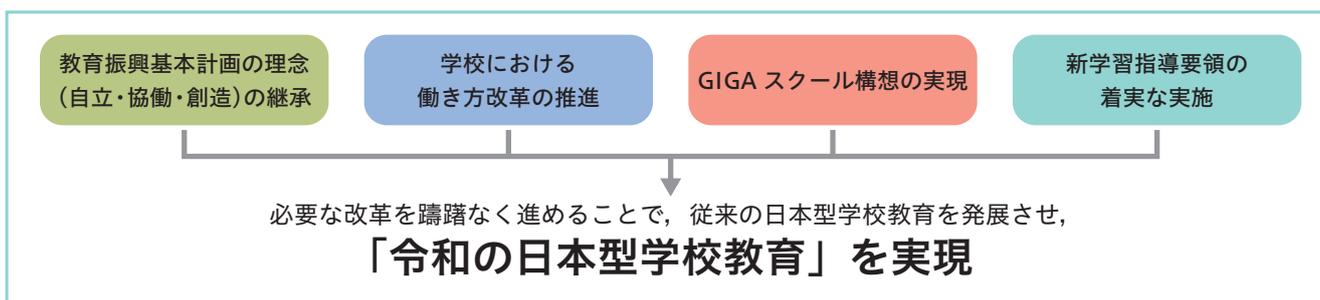
2021年1月に、中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～が出されました。同答申では、GIGAスクール構想やSociety 5.0をキーワードに、今後、目指す学校教育が次のように述べられています。

- 日本の学校教育は、学習機会と学力の保障に加えて、全人的な発達・成長の保障や、人と安全・安心につながる居場所としての福祉的な役割を担ってきた。
- 日本型学校教育が果たしてきた役割を継承し、学校の働き方改革やGIGA スクール構想を強力に推進し、新学習指導要領を着実に実施し、学校教育を社会に開かれたものにしていく。
- 文部科学省をはじめ関係府省、教育委員会、首長部局、教職員、家庭、地域等を含め、学校教育を支える全ての関係者が役割を果たし連携し「令和の日本型学校教育」の実現に向けた必要な改革を果敢に進めていく。

同答申は、多岐に渡る論点を「総論」と「各論」で92頁にわたって提示し、図1の通り、「令和の日本型学校教育」の構築のイメージを掲げています。これらの背景には、学校における働き方改革の推進や、新学習指導要領のほか、2018年6月に閣議決定された第3期教育振興基本計画と、「未来の教室」実証事業が大きく関係しています。

なお、「未来の教室」実証事業とは、2018年度より、経済産業省によって全国の学校で進められたものです。1人1台端末とEdTech(エドテック)を活用した新しい学び方の実証をねらいとしたもので、①学びのSTEAM化、②学びの自立化・個別最適化、③新しい学習基盤づくりを3つの柱としています。

図1 「令和の日本型学校教育」の構築のイメージ



2. 戦後日本の学校教育の位置づけの変化

このように学校教育のあり方が、大きく問い直されている背景にはどのような変化が関係しているのでしょうか。

5ページの表1にあるように、戦後の日本の学校教育の変化を三段階に区分することができます。

第一段階の戦後から1960年代の高度経済成長期においては、教育は「善きもの」と信頼され、そこでは子どもの「発達」という考え方をもとに、社会の進歩を先取りする役割が教育に期待されてきました。

第二段階の1970年代から1990年代では、高度経済成長もかげりを見せ、校内暴力や不登校、高校中退が増加したことから、教育の神話性や学校の支配・抑圧性が問われることになり、教育や学校を「善きもの」とする近代的価値が疑われはじめました。

第三段階の1990年代後半からは、グローバル化が加速し、従来の産業構造が大きく転換するなかで、近代的価値や制度の見直し、再編が進み、かつて批判された教育をどのように再構築するかが問われています。つまり、特に1990年代後半から、グローバル化の加速や産業構造の転換のなかで、学校に対する社会の側からの認識が少しずつ変化し、学校制度の価値や存在意義を問い直すことが求められ、コロナ禍を経て、改めて新たな学校教育のあり方が模索される時代になってきたと言えます。

3. 働き方改革とチーム学校

一方、日本の教員の長時間勤務が看過できない深刻な状況であることが明らかになってきたことから、学校における根本的な働き方改革と「チームとしての学校」のあり方を関係づけ、連動して進めていくことの重要性も近年唱えられてい

表1 戦後の学校教育の三段階

段 階	年 代	時代の特徴	教育の位置づけ
第一段階	戦後～1960年代	高度経済成長期—近代	<ul style="list-style-type: none"> • 教育＝「善きもの」と信頼 • 子どもの「発達」を軸に社会の進歩を先取りする役割
第二段階	1970年代～ 1990年代	高度経済成長の終わり —近代的価値への疑い	<ul style="list-style-type: none"> • 教育や学校への批判の高まり • 校内暴力や不登校、高校中退の増加 • 教育神話の虚偽性や学校の支配・抑圧性への問い • 不平等の再生産装置としての学校への批判
第三段階	1990年代後半～現在	グローバル化の加速 —ポスト産業社会	<ul style="list-style-type: none"> • 近代的価値や制度の再編 • 批判されたかつての教育を再構築・再定義する時代

出典：小玉重夫「今、教育を再定義する意義」小玉重夫編『教育の再定義』岩波書店、2016年、1-2頁を参考に作成。

ます。

具体的には、2017年8月に、中央教育審議会初等中等教育分科会・学校における働き方改革特別部会によって「学校における働き方改革に係る緊急提言」が公表されました。同提言は、今後、国として持続可能な勤務環境整備の支援を充実させるためには、「チームとしての学校」の実現が必要であるとし、専門スタッフの配置促進のあり方を次のように提示しました。

- スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーについて、課題を抱える学校への重点配置を含めた配置の促進、質の向上及び常勤化に向けた調査研究
- 多様なニーズのある児童生徒に応じた指導等を支援するスタッフの配置促進
- 教員の事務作業（学習プリント印刷や授業準備等）等をサポートするスタッフの配置促進
- 部活動指導員の配置促進及び部活動の運営に係る指針の作成
- スクールロイヤーの活用促進に向けた体制の構築

チーム学校としての具体的なかつ実効性のある取り組みが求められていますが、例えば、「令和3年度教育委員会における学校の働き方改革のための取組状況調査結果」によると、7ページの図2の通り、**教師の業務負担を軽減するための支援スタッフ**について、都道府県85.1%、政令市100%、市区町村81.3%の自治体で配置が進んでいます。また、そのうち96%以上が、教員業務支援員として任用している人材が配置されています。

さらに、部活動指導員等については、すべての都道府県・政令市において配置済みとなっており、市区町村では68.9%が配置済みで、いずれも増加傾向にあります。

2017年3月改訂の中学校学習指導要領の総則においても、「学校運営上の留意事項」において、部活動について、学校や地域の実態に応じて、地域の人々の協力や社会教育施設、社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫

を行い、持続可能な運営体制が整えられるようにすることが求められています。また、2020年9月には、スポーツ庁によって、学校の働き方改革を踏まえた部活動改革の必要性が指摘され模索されているところです。

4. 学習指導要領のこれまでとこれから

学習指導要領は、6ページの表2にある通り、1947年、1951年に試案として編集され、その後、ほぼ10年をサイクルとして社会状況に応じて改訂されてきました。

近年の教育改革の動向を理解するには、1990年代後半からの教育課程改革の動向をとらえることが求められますが、1998年の学習指導要領改訂では、教育課程の基準の大綱化が一層進み、総合的な学習の時間を基軸として各学校の主体性が期待されました。しかし、その施行前から学力低下批判が過熱し、文部科学省の方針も二転、三転しました。

2003年に文部科学省は学習指導要領を一部改正し、最低基準としての位置づけを明確化しました。しかし、その後も国際学力調査の順位が低下し続けたことから、学力低下批判は収まらず、2005年には文部科学大臣が、学習指導要領の見直しを要請し、ゆとり教育の見直しや授業時数増加が求められました。

2008年の学習指導要領改訂に際しては、教育課程の理念として「生きる力」の育成が引き続き重視された一方で、習得、活用、探究の内容が盛り込まれました。40年ぶりに授業時数が増加し、総授業時数は小学校で約5%、中学校で約4%増加するに至ります。また、2008年の学習指導要領の改訂に大きな影響を与えたのが、2006年の教育基本法改正でした。改正教育基本法に制定された公共の精神の尊重、教育目標の徳目規定、義務教育の目的などが学習指導要領に反映されることとなります。また、2015年には、学習指導要領の一部改訂により、道徳の時間が「特別の教科 道徳」として位置付けられました。

2017年の学習指導要領改訂においては、表2の通り、育成する「資質・能力」の明確化や学習評価や条件整備等との一体的改善・充実、「社会に開かれた教育課程」、アクティブ・ラーニングの重要性が指摘されました。また、各校によるカリキュラム・マネジメントの推進が期待され、教育課程編成

における現場主義の重要性も唱えられてきています。

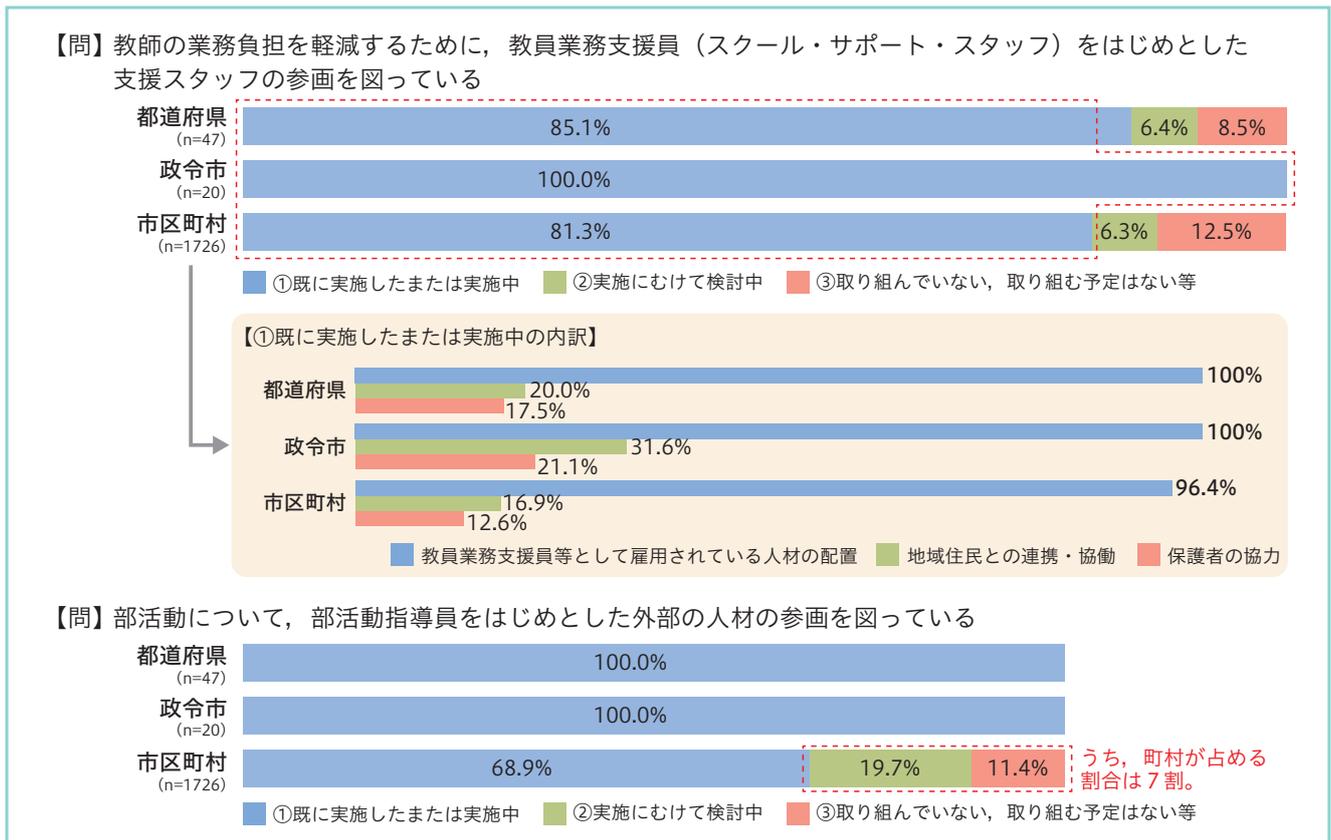
以上のように、学校の機能や存在価値が改めて問い直される現代にあって、校長や副校長をはじめとした学校のリーダーは、教育改革の担い手としてその重要性がますます高まっています。

表2 学習指導要領改訂の歴史

1947	「試案」として編集された学習指導要領刊行：教師たちの教育課程編成の手引きとして編集（1951年版に続く）
1958	学習指導要領官報告示： <ul style="list-style-type: none"> 高度経済成長を前に、科学技術教育への政財界の強い期待もあり、経験主義的な内容を見直し、教科の系統性を重視 「道徳の時間」新設、基礎学力の充実や科学技術教育の充実が目指され、教育課程の国家基準としての性格が強化
1961	全国一斉学力テスト実施（1966年に中止）
1968	学習指導要領改訂： <ul style="list-style-type: none"> 「教育内容の現代化」として、教育内容の水準向上や授業時数の増加 高度経済成長下の国際競争のための学力向上や科学的な概念・能力育成
1976	研究開発学校制度開始：実践研究を通じた教育課程・指導方法開発に向け、学習指導要領等の現行基準によらない教育課程編成・実施が認められる
	旭川学力テスト事件判決（最高裁判決）：国家の教育権と国民の教育権の双方を一方的に極端であるとし、国家と国民の双方が一定の範囲で子どもの教育内容の決定に関与できるとする折衷的立場が示される
1977	学習指導要領改訂： <ul style="list-style-type: none"> 校内暴力や教育荒廃、詰め込み教育への批判を受けて、ゆとりある充実した学校生活の実現が目指される（ゆとり教育） 授業時数、学習内容の減少（その傾向は1998年改訂まで続く）
1989	学習指導要領改訂： <ul style="list-style-type: none"> 「自ら学ぶ意欲や、思考力、判断力、表現力」などを学力の基本とする「新しい学力観」を提示 社会の情報化や国際化、価値観の多様化を受けて、個性を生かす教育の充実を図ることが目指される 社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成に向けて、道徳教育の充実が指向される。新教科「生活科」も導入
1992	月一回の学校週五日制開始（学校教育法施行規則改正）
1998	学習指導要領改訂： <ul style="list-style-type: none"> 1996年中教審「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第1次答申)」が「ゆとり」のなかで、自ら学び、考える「生きる力」の育成を提言 これを受けて、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など、各学校が創意工夫を生かした教育活動を行うための「総合的な学習の時間」が小学校第3学年以上に新設 教育課程基準の一層の大綱化によって、「特色ある学校づくり」や各学校の主体性の発揮が期待される
2002	学校週五日制実施と相まって、学力低下が社会問題化：2002年文部科学大臣「学びのすすめ」で、「確かな学力」の考えが打ち出される <ul style="list-style-type: none"> 2003年に学習指導要領を一部改正。最低基準としての位置付けが明確化。学習指導要領にない発展的な学習を教科書に載せることが認められる
2006	教育基本法改正
2007	全国学力・学習状況調査開始
2008	学習指導要領改訂： <ul style="list-style-type: none"> 生きる力の育成を指向するものの、習得、活用、探究の内容を導入 40年ぶりに授業時数と学習内容が増加。活用型学習や言語活動の充実とともに、PISAの順位低下を踏まえて学力向上が明確に打ち出され、1970年代末から続くゆとり路線を大きく転換 学習指導要領によらない「教育課程特例校制度」導入
2015	学習指導要領の一部改訂により、道徳の時間を「特別の教科 道徳」として位置付け
2017	学習指導要領改訂： <ul style="list-style-type: none"> 育成する「資質・能力」の明確化 指導の目的を「何を知っているか」とどまらず「何ができるようになるか」に発展 社会とのつながり、各学校の特色づくり、インクルーシブ教育システムの理念の推進 学習評価や条件整備等との一体的改善・充実、アクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメントの重視

筆者作成

図2 教員業務支援員や部活動指導員の活用状況



ロンドン便り



魅力詰まった夏の風物詩・ウィンブルドン

時事通信社ロンドン支局特派員 青木貴紀

心地よい日差しが差し込み、緑色の芝コートがよく映えた。テニスのウィンブルドン選手権が6～7月、ロンドン郊外のオールイングランド・クラブで開催された。今年は3年ぶりに新型コロナウイルスの感染対策による制限がなくなり、2週間で50万人以上の観衆が訪れてにぎわった。

1877年に始まり、四大大会の中で最も歴史のある大会。地元の人たちが「ウィンブルドンが始まると、夏の訪れを感じる」と話す風物詩だ。日本でいう高校野球の甲子園大会のような感覚だろうか。

恒例の「大行列」も復活した。大会初日は入場券を求めて世界各地から訪れた数千人が、会場隣のウィンブルドン・パークに並んだ。テントを張り、キャンプ感覚で泊まる人もいる。ファンは「久しぶりだけど、良い雰囲気は変わらない」とうれしそうだった。

会場内は至る所に色鮮やかな花や植物が植えられ、まるで美しい庭園のよう。華やかで格式の高い空気に包まれている。独特の規定があり、選手は白を基調としたウェアの着用を求められる。テニスは社交の場でもあったため、汗染みが目立つのを防ぐのがもとの理由だという。

名物グルメといえは、「ストロベリー・アンド・クリーム」。ロンドン南東部のケント州で早朝に採れたイチゴに、クリームをかけて食べる。2018年は2週間で16万食以上が販売された。定番の飲み物がピムス。ジンベースにしたキュウリなどが入った爽やかなカクテルだ。

伝統を重んじる一方で変化もある。大会中日にあたる日曜日は「ミドルサンデー」と呼ばれ、これまでは原則休養日だった。芝コートの保全技術の進歩により、良質な状態を保てるようになり、今年から試合が組み込まれた。

男子シングルスはノバク・ジョコビッチ（セルビア）が4連覇を果たし、幕を閉じた。よく見ると、優勝トロフィーの上にパイナップルが乗っている。かつて希少価値があり、富や名誉の証だったためとの説もあるが、真相は不明。ウィンブルドンは最高峰のプレー以外にも、たくさんの魅力が詰まっている。



敷地内の大型モニターで観戦を楽しむファンら＝7月5日、英ウィンブルドン





体育専科教員による 授業改善の推進と 体力づくりの取り組み

北海道鷹栖町立
鷹栖小学校
教諭 中山敬史

昨年度までの3年間、体育専科教員（以下体育専科）として旭川市立永山西小学校（以下、本校）で勤務していました。振り返ってみると「先生、今日の体育が楽しみ！」と期待を抱き授業に臨む児童が増えたことや、本校の先生方と一緒に授業を創り上げることができたことに嬉しさを感じていました。コロナ禍で2年間は様々な活動が制限されたことがあり、やり残したことを反省することもあります。主体的・対話的で深い学びの実現に向け授業改善を推進し、全ての児童が楽しく・安全に安心して運動に取り組むことができるように努めました。ここでは、3年間の体育専科の取り組みや学校の変容を紹介することで、少しでも日々の授業改善や体力の向上の取り組みに役立つ手伝いができればと思います。

① 本校の実態

本校は開校130年を迎えた歴史のある学校です。児童数は550名程度で推移し、旭川市でも児童数の多い小学校の一つです。体育専科が配属された初年度は、新体力テストの結果や日常の体育授業などから本校の課題を見付け、解決の方策を立案するところから着手しました。

新体力テストからは、「実技得点が全国平均を大きく下回り、女子は全ての項目で平均を下回る。総合得点の下位層（D・E群）の割合の高い」「高学年女子が運動や体育を意欲的に感じていない傾向がある」「目標を示したり、振り返ったりする場面が少ない」「体育での運動量の確保が不十分で、体を十分に動かせていないと感じている児童が一定数いる」などの課題がありました。体育の授業からは、「学年合同の体育が多い」「基礎的となる知識・技能が十分に定着していない」「1時間の指導過程が揃っていない」、体力づくりからは、「自己の目標をもてるような取り組みが少ない」「運動のできる環境が整備・充実していない」「家庭と運動した取り組みが少ない」といった課題が見つかりました。

以上の複数の課題を解決するための手立として、①日々の体育授業の充実、②自主的に取り組める体力づくり、③体育の教育環境の整備の3つを柱として進めました。



② 日々の体育授業の充実

1年目は、体育専科が全学年の授業を行い、学校全体の体育授業の大まかな指導過程を揃えました。具体的には、運動の特性に触れるような授業展開や、運動の系統性を意識した学びの組み立て、主運動につながる準備運動の充実、学習課題の明確な提示と振り返りの充実などです。こうすることで、児童が学習の流れを理解し主体的に学習に臨むことができ、時間を有効に使うことにもつながりました。

2年目からは、徐々に学級担任の先生方が中心となり、体育専科とチームティーチングで授業を行うことで、授業改善の取り組みを進めました。運動を苦手としている児童が多い実態がありましたが、体育専科が運動に苦手な児童に自己の課題や解決方法を伝えたり、励ましの声を掛けたりすることで、苦手意識の軽減につながったと考えます。先生方向けの通信を発行し、実践の紹介や実技講習会の開催等で指導力の向上を図りました。日々の授業が改善



し充実することで、運動が好きな児童が増え、運動の日常化にもつながりました。

学習の目標や流れ、学ぶ内容などを児童と共通理解して単元を進めるため、教育課程にある全ての単元の学習カードの作成に取り組み、学習カードを用いて授業を行いました。作成した学習カードは、学校のネットワークサーバーで共有し、児童の実態に合わせて改善や変更ができるようにしました。また、授業で使用した手本の動画や画像など



この3年間は体育専科が中心となり進めましたが、先生方の向上心と協力がなくては前に進みません。その点、本校は協力的な先生が多く、協働して体育の授業改善や体力づくりの取り組みを進めることができたと思います。結果、運動が好きな児童が増え、休み時間に汗を流したり、家庭などでも日常的に運動に親しむ児童が増えたりしました。

それは、新体力テストの結果にも表れ、体力合計点のTポイントが、男女ともほぼ全項目が全国平均を上回る結果となり、総合得点の下位層（D・E群）の割合も大幅に減少しました。

体育専科教員がいなくなった後も、授業改善や体力づくりの推進を継続することが今後の課題ですが、今までと同じように推進してくれると期待しています。

豊かなスポーツライフを形成する上で、運動好きな子どもを育てることが大切な視点であり、そのためにも、体育授業の充実が必須であると考えます。ここでは、一部しか紹介できませんでしたが、学校全体の体育の授業改善が、児童の運動に対する意識や体力の向上の一番の近道です。北海道の体育専科については、北海道教育委員会の体力向上のホームページに様々な実践例が掲載されているので、そちらも参考にいただければ幸いです。

も残しています。こうすることで、体育専科教員がいなくても、授業改善の取り組みが進むと考えます。

③ 体育の教育環境の整備

旭川市は、半年近くが雪に覆われ、グラウンドを使用することができません。その期間の体育は、体育館で行うことになり、学級数の多い本校は、学年合同での授業が増えます。しかし、100名以上で体育を行うと、用具や場が不十分で、体を十分に動かせていないと感じていたり、基礎的な感覚や技能を身に付けることができなかつたりします。そこで、体育館の空きが出ないように2週間分の体育館予約表を作成し、教育課程を見直すことで、学年合同の授業を減らし、学級単位で行うことができるようにしました。また、大人数でも行えるように必要な用具を作成し、日常的に運動に取り組めるような環境の整備に努めました。



体育授業での タブレット活用は、 メリハリが重要

熊本県熊本市立
長嶺中学校
教諭 一安晋太郎

全国の小中学校にタブレット端末を1人1台導入する「GIGAスクール構想」が動き出し、教育現場のデジタルトランスフォーメーションが求められている。熊本市では、2018年9月から先行導入校を選定、教員に1人1台のタブレット端末を導入し、2019年4月には全小学校、2020年4月には全中学校を対象を拡大、そして、2021年1月末にはすべての小中学校で児童生徒1人1台の体制に移行した。新しい学習指導要領とともに、予測困難な未知なる社会の課題に自らの力で立ち向かっていくための「知識と技能」、それを活用するための「思考力、判断力、表現力」、これらを効果的に学ぶための大きな原動力となる「学びに向かう態度、人間性等」の育成のためにICT機器の活用はマスト事項であると私も強く認識する。

① タブレット学習の課題とは？

スポーツ庁の「児童生徒の1人1台のICT端末を活用した体育・保健体育授業の事例集」にあるように、小中学校の保健体育科のICT活用をめぐるのは、様々な取り組みがなされている。

しかし、そこにはまだ課題もある、と筆者は考える。とりわけ、体育学習とは関係の薄いマネジメント場面（タブレットを持つ、持ち運ぶ、準備するなど）や、学習指導場面（教師の説明、演示、指示など）が増えることにより、本来増やすべき認知学習場面および運動学習場面が極端に減ってしまう、というデメリットを生み出しているのではないかと。体育でICTを推進していく上では、この点に十分留意しておく必要がある。

② 単元の中でいつ、 どうやって使うか？

そこで、マネジメントや学習指導場面の増加を抑えつつ、タブレットの活用を図る授業の在り方を考えてみたい。中学1年生のバレーボール、10時間単元を計画したと想定する。

1 時間目

単元1時間目はバレーボールの楽しさに多く触れさせるため、なるべく運動学習場面を増やしたい。そのためにも、まずは授業に対する生徒のモチベーションを喚起したい。体育館の大きなスクリーンを使って、大音量で日本代表の

ゲーム動画を視聴させる（大接戦ののち、日本代表が勝利する試合）。そのままバレーボールに自由に触れさせる時間を取る。

その後、授業を展開し、タブレットを使うのは授業終末部分のみ。タブレットのアプリ（ロイロノート）を使用し、単元各時間の授業の流れと評価項目を入れた自己評価表（表1）を一斉送信する。これにより、教師の学習指導場面の時間を減らすことが可能である。

ところで、タブレットの利点は気軽に動画が視聴できるところにある。そこで筆者は、フェアプレーの動画を視聴させるようにしている。体育においてフェアプレーは、「学びに向かう態度、人間性等」の育成につながる。動画は、「RESPECT～大切に思うこと～」（日本サッカー協会）というタイトルの1分程度のコンセプト映像である。サッカーだけでなく、どのスポーツにも通じるフェアプレーの象徴的な場面がコンパクトにまとまっているので、生徒が動画を見てこの単元で自分たちにできることを考え、実践できるようにしている。この動画のURLをアプリで一斉送信するところまでを1時間目に行う。その後、2～3時間目まではICT機器は使用しない。

4 時間目

この時間は、学習者同士でペアを作り、タブレットで動画を撮影する。オーバーハンドパス、アンダーハンドパスのポイントを確認させ、撮影した動画で自分の動きを振り返り、できているところの確認と課題点の修正を行わせる。どちらのパスも、自分の意志でボールをコントロールできることがポイントである。私の本授業では具体的に、

表1 自己評価表の一部

中学校保健体育【 毎日の記録 】()年()組()号 名前() 生徒配布用シート(表面)
 領域「 E-球技 」【 1.2年 】(バレーボール) < 全 10 時間計画 >

「**技能**」の目指す姿：ボールや用具の操作と定位位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること。
 「**態度**」の目指す姿：積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。
 「**知識・思考・判断**」の目指す姿：バレーボールの特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

本日の評価基準(B基準)	A B C	学習の記述評価
1 ○学習計画・評価・技術の名称及び基本的なルールがわかる。 ○バレーボールの歴史的背景について理解する。	_____
2 ○用具の準備や後片付けの役割に責任を持って取り組もうとする。 ○教えられた行い方から自分にとって効果的なポイントを見付ける。 ○「 基本的なボール操作1 」ができる。<技能1> ○勝敗を競う楽しさや喜びを味わう運動であることを理解する。	_____	□仲間にどんなアドバイス・声かけをしたか?.....
3 ○仲間の良い発言・行動を認め、賞賛の声をかけようとする。 ○教えられた行い方から自分にとって効果的なポイントを見付ける。	_____	□ボールを高くパスするためのコツは?.....

次のように示すようにしている。

- ボールを90度の角度(真上)にあげたら「仲間につなぐパス」
- ボールを60度に返すことができれば「相手への攻撃のためのパス」

このポイントをよりどころにして、生徒たちは動画を見ながらボールの軌道についてのコミュニケーションを取ることで、そのために手、肘、膝の使い方、さらには落下地点への入り方で90度と60度のパスが使い分けられることを発見する。ペアでの気づき等をアプリで全ペア、授業者に送らせる。その後、生徒はタブレットを自宅にも持ち帰るので、生徒の気づき等を授業者がまとめて、生徒へカードを送る。生徒は自宅にしながら家庭学習の一環として、本時のポイントを確認する。

その後、5～7時間目まではICT機器を使用しない。

8時間目、10時間目

8時間目にゲームにつながる集団技能を学ぶ。定位置に

戻る動きを意識しながら、ゲームの様相をタブレットで撮影し、グループで動画を見ながら気づきを確認する(写真**1**)。10時間目の授業後半には、ロイロノートで授業のまとめを回収する。そして、次の単元の1時間目に、回収した授業のまとめを生徒に発表させ(写真**2**)、次の単元のオリエンテーションへとつなげていく。

3 今後に向けて

ICTの活用で筆者が重要だと考えるのは、タブレットを毎時間活用することではなく、運動学習場面を増やしなが、メリハリをつけてICTを効果的に使う、そのための意図的な計画を立てることである。タブレットを「とりあえず使わせてみる」という時期は過ぎ、「意図的・計画的・効果的に活用する」という時期に来ている。全国の体育・保健体育授業に関わる先生方、ともに頑張りましょう。今回はICT活用に主眼を置き、限られた紙幅の中、駆け足で説明してきたので、単元の学習内容や教材については十分に語れなかった。この点は、次の機会に譲りたい。



グループで確認する



授業のまとめを発表し合う

「小さじ1杯の工夫」で授業が変わる！



子どもが変わる！



鎌倉女子大学講師 藤原昌太

授業始めのお話タイム

「キーンコーンカーンコーン」。「はいっ、では保健の授業を始めます、今日は〇〇というテーマについてやっていきます。では教科書の〇〇ページを開いてください」といったように授業を進めている先生は多いでしょう。

でも、体育の授業では、いきなり授業始めから50mを走るような授業はありませんね。怪我をする可能性もありますし、子どもたちも突然で心の準備ができず本来の力を発揮できません。

保健の授業でも同様に、本題に入る前に頭の準備運動を試みると良いでしょう。例えば、導入時に時事的な話題や、クラスで流行っていること、子どもたちにとって関心が高いことなどについて授業内容と関連させて話ができるとう良いでしょう。それには日頃から、授業に使えるようなネタを探すアンテナを高くしておき、ネタをストックしておく必要があります。さらに児童生徒の様子、興味関心、流行を把握しておくことも大切でしょう。

もう一つ、レディネス学習と言われる、授業の最後に次の授業内容についての課題などを提示し、取り組ませる方法もあります。それによりスムーズに授業内容に取り組みするという有効性についての報告もあります。前回の授業の感想の紹介や、質問について答えるということも良いでしょう。児童生徒にとって、身近で、関心のある内容を扱う保健の授業は、このような工夫がしやすい授業だと言えます。



日ごろから、授業の導入で使える時事的な話題を集めておく

注目の一冊！



**確かな学習状況を見取る
小学校体育の評価規準づくり**
高田彬成・森良一・細越淳二 編著
B5判・200ページ
定価1,980円（本体1,800円＋税10%）

全学年・全領域の 評価の在り方と進め方を解説

小学校の先生がより良質な授業を実現させ、あわせてより良質な評価活動を進められるようになること（指導と評価の一体化の実現）をめざして、体育における全学年・全領域の評価の在り方と進め方について、「十分満足できる」状況の児童の姿の提案や観点別評価規準の作成例といった実践的な情報を提供する。

体育と保健のひろば 2号

2022年No.2(通算2号) 2022年9月1日発行

編集 大修館書店編集部

発行所 株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

TEL 03-3868-2298/FAX 03-3868-2645

出版情報 <https://www.taishukan.co.jp/>

印刷・製本 広研印刷株式会社

